

中島源次教授追悼



中島源次教授 略年譜

- 明治32年10月1日 佐賀県小城郡芦刈村中村に生まれた。
- 大正7年3月31日 佐賀県立小城中学校を卒業。
- 同 9年9月1日 早稲田大学予科第三部を修了。
- 同 年4月 同大学文学部英文科に入学。
- 同 12年3月31日 同学部同学科を卒業。
- 同 年4月7日 福井県立福井中学校教諭の嘱託を受けた。
- 同 13年4月14日 佐賀県立鹿島中学校教諭に任ぜられた。
- 昭和2年4月 九州帝国大学法文学部（英語英文学専攻）に入学。

- 同 5年3月31日 同学部を卒業。
- 同 年10月4日 台北高等学校講師の嘱託をうけた。
- 同 6年8月26日 台南州立台南第一中学校教諭に任ぜられた。
- 同 20年9月 台南工業専門学校講師を兼任された。
- 同 21年6月1日 佐賀県立伊万里中学校教員の嘱託をうけた。
- 同 23年4月1日 佐賀県立佐賀第二高等学校に勤務を命ぜられた。
- 同 24年4月1日 佐賀県立佐賀高等学校講師（兼任）に任ぜられた。
- 同 25年3月31日 福岡女子大学助教授兼福岡県女子専門学校教授に補せられた。
- 同 27年6月1日 福岡女子大学教授に補せられた。
- 同 35年4月1日 福岡女子大学附属図書館長を命ぜられた。
- 同 年 同月 同日 福岡女子大学協議員を命ぜられた。
- 同 35年6月22日 自宅にて逝去。

逝ける中島先生を憶う

下 條 信 敏

佐賀高校教諭、佐賀大学講師を勤める傍ら佐賀市郊外芦刈村の生家を守りながら英文学

の研究に精進していた先生に、白羽の矢をたて本学への転任方を懇願すること再三、やつと快諾を得たその時の私の安堵と喜悦の程は今尚嬉しい思い出である。

先生は、その筆蹟の示すが如く頗る凡帳面で、責任感の強いかたであつた。10年に近い同僚生活の間、互に深く信頼し互によく協力しあつて、唯の一度も感情の縫れを微塵だに覚えなかつたのは、先生の人柄の然からしめるところであつたと、敬意の念と感謝の情を禁ずることができませぬ。

先生は、本学開学の当初から、英語、英文学の講義を担当せられたが、「英詩の鑑賞」の講義は先生の得意とするところで、その蘊蓄を傾け懇切丁寧、かつ巧緻精細、批判もあり、感慨もあり、教訓もあつて、学生を静かなる喜びに或は深き冥想に導き、尽きざる心の饜を楽しませると同時に、学生に英詩鑑賞の態度を養つて下さつたのである。先生は、文芸と社会が密接な今日では、文芸を根本から研究してその真精神を顕現せねばならぬところから、浅薄なチャーリズムに囚われたり、又羊頭狗肉的なところがあつてはならぬと信じ、文芸を熱愛し研究せんとする学生の木鐸として、真摯に進まんとする文学に対する態度と信念を堅持していたと、忖度することができる。

先生は、また、和歌に堪能で、若い頃からの自作の珠玉は約二千にも及び、これらをまとめ歌集として世に出すつもりであつたのに、遂に存命中世に出ることなく笈底に収められたままとなつていたのは遺憾であつたが、この度先生と同僚、朋友、女大卒業生などの有志の方々の発起で、歌集となつて世に出る運びに至つたことは、誠に喜ばしいことで、先生の御霊も嘸かし御満悦のことであろう。

先生は赴任の当時は健康で、テニスを好み、職員同士の場合には、先生が後衛私が前衛で出場した楽しい思い出もある。ところが、先生は計らずも健康を害し、長きに亘り静養に専念する身となつた。しかし、その後、健康が回復して再び教壇に立つこととなり、河瀬先生退職後は英文科主任、図書館長として学生の指導に、本学発展のために、愈々大いに為すところであろうとした時、忽然として逝去せられたことは、本学にとつて一大損失といわねばならぬ。ありし日の先生を追慕して誠に痛惜の情にたえませぬ。

中島源次教授を憶う

後 藤 武 士

故中島源次教授と私との交友は昭和初期の学生時代からであるが、卒業後はそれぞれ任地を異にしていたため、終戦後教授が女子大にこられるまでの間は、おたがい年賀状のやりとり位で殆んど顔を見ない長い年月が続いた。福岡へこられてからのことは誰もまだ記憶にあらたなところであろうから、私は遠い昔の学生時代の思い出をたどつてみることにする。九大に英文学の講座が創設されたのは大正14年のことで、最初の専攻学生は私を入れて10名で、それから毎年ほぼそれ位の学生が入つてきたと記憶する。中島氏は私より1